

2014.5.18 「異邦人の信仰」マルコによる福音書7:24～30

今朝の説教題は「異邦人の信仰」です。異邦人とは一般的には外国の人、異国の人のことです。聖書に出て来る異邦人とはイスラエル民族の立場から見た異民族、または居国民をさしています。

ユダヤ人は神の約束によって特別に選ばれた民族であり、そのしるしとして律法が与えられた神の民(選民)であることを誇りとし、ユダヤ人以外の民族を「異邦人」と呼び「律法を持たない者」「割礼のない者」として差別視する言葉でした。

しかし、そのような見方はイエスの愛には通用しませんでした。ヨハネ福音書10:16で「わたしにはこの囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」とイエスは言われていますが、「この囲いに入っていないほかの羊」とは異邦人のことを指しています。

或る日イエスはティルスという異国の町に行かれ、一人のギリシア人女性に出会いました。この人は汚れた霊に取りつかれた幼い娘をもつ母親でした。イエスがあらゆる病気を治されるお方であることを聞いて、イエスの足もとにひれ伏して懇願したのです。「私の娘から悪霊を追い出して下さい」……と。

当時の人々は病気を汚れた霊に取りつかれている者におこるものと考えられていたのです。この異邦人女性の態度(行動)は普通には考えられないことでした。でもイエスは「まず、子供たちに十分食べさせなければなりません。子供たちのパンを取って、小犬にやってないけない」と言われたのです。

彼女は信仰によって「主よ、しかし、食卓の下の小犬も子供のパン屑はいただきます」と答えたので、イエスは「それ程言うならよろしい……」と言われたのです。(城間)